

保育実習Ⅰから保育実習Ⅱに繋ぐ保育者養成のあり方を探る（1）

川谷 和子 ・ 橋詰 啓子

KAWATANI Kazuko / HASHIZUME Keiko

本学こども学科の保育実習の第一段階（保育所）を終えた学生を対象に実施した実習の振り返りに関する調査を基に、学生の記述内容の分析を行った。本研究の目的は、学生が初めての保育実習（保育所）において、子どもとの関わりから学んだこと、さらには、戸惑いや困り感を明らかにすることで、今後の実習指導のあり方を探ることである。調査結果の分析から、学生の戸惑いや困り感が明確になったのは実習記録の記述であり、今後、保育実習第一段階の指導では、従来からの実習記録の記述内容の指導に加えて、学生が保育を観察・記録する着眼点、保育者の援助の意図をとらえる視点、子どもの発達理解などに関する指導に、より多くの時間を費やす必要性が明らかになった。それらが、保育実習Ⅱの指導計画の立案や保育実践指導に繋がる始点でもある。また、実習先との連携については、実習時の配属クラスの相談や実習記録の記述に関する事前調整の必要性が推察される。

キーワード：自己の振り返り、保育実習指導、保育者養成

1. はじめに

本学は、保育者養成校として、保育士資格、幼稚園教諭2種免許状が取得できる単科の短期大学である。入学する学生のほとんどは、子どもが好きで、子どもと関わる仕事を希望し、保育者になることを夢見て学びを始めることになる。本学では、保育士資格取得にあたり、1年次2月に子ども達が過ごす保育所、認定こども園（以下、保育所等と記す）で現地実習を行うことになる。乳幼児期とは、人格形成に極めて重要な時期であり、その子どもが生活する場としての保育所等では、「養護と教育が一体的に行われている」⁽¹⁾ため、様々な配慮や援助が保育者に求められる。子どもが好きというだけでは、適切な関わりができないことも事実である。だが、子どもが好きであるということは重要な要素であり、大学で学ぶ様々な知識とそれらを保育所等で子どもたちと実際に関わることで、「座学と実学の循環性」⁽²⁾が成り立つと考える。

初めての保育実習（保育所）を経験した学生が、子

どものことを愛おしく思い、子どもがますます好きになったと述べる学生も多い。しかし、一方で自分は保育に向いていない、あるいは保育者になることに自信を無くしたと考えてしまうことは少なからずある。

自信を無くす原因として、小島⁽³⁾は実習を通して「現実とのギャップを経験する」と述べ、そのギャップの緩和策を検討した。しかし、学生が実習でのギャップをどのように感じ、戸惑う要因となる具体的な内容については言及されていない。また、川原は⁽⁴⁾は日誌等の作成の難しさから、入学前に抱いていた保育者へのイメージが一旦崩れると述べている。

では、本学の学生は実習に際して、どのような姿勢で臨んでいるのだろうか。実際には、実習に不安を感じつつも、実習指導内容の学びを自分なりに努力して理解を深め、絵本の読み聞かせや手遊びを練習するなど、子どもとの関わりに必要な知識や技術の習得に工夫を重ねる姿が多く場面で見られることから、資格取得に向けて真摯に向きあっていることが伺える。

心構えや準備の点で不十分なことがみられても、事前

指導のなかで繰り返し指導や説諭を行うことで、徐々に心構えができていくようになる。そうして、様々に実感したことを踏まえ、多くの学生は実習を通してさらに経験を積み重ね、学びを深めていくことで、保育の楽しさ、奥深さを捉え、保育者としての道を歩み始めるのだと考える。川原(4)は、実習を通して「改善するための具体的な方法を知りたいと強く意識し、それを実践し成功体験を得るという過程」を通して「学びの実感につながる」と述べている。しかし、初回の保育実習では成功体験よりも上手いかなかったと実感する体験が多く、結果的には、それらが自身の課題に気付く機会となっている。

筆者らは、保育実習Ⅱ（第二段階 保育所）の実習指導を行う担当者として、第一段階の保育実習（保育所）を終えた学生を対象に、実習の振り返りと共に、実習先で受けた指導内容に関する調査を2022年より毎年行ってきた。それらの調査から学生の実習経験の傾向を捉え、学生が初めての保育実習（保育所）において、どのように学び、何に戸惑い、何に対して手ごたえを感じ、子どもとの関わりから何を得ているのか、それらの内容を把握することで、第二段階（保育所）の指導において、さらに必要と思われる学修内容について検討、付加して実習指導を行ってきた。

本学では、2025年度より実習に関する抜本的な見直しをおこない、実習指導に関する内容の共通性、関連性、独自性を精査しながら、指導のあり方を検討している。

本研究は、「現実とのギャップ」や「保育者へのイメージが崩れる」その要因となる背景を学生の記述内容から捉え、調査結果をより詳細に分析する。その分析を元に実習事前指導として何が必要でどのような改善ができるかを検討し、より実習に役立つ学びや準備のために精査された実習指導内容に繋ぐことを目的とする。

2. 方法

1) 調査日：2025年4月

2) 調査対象者：保育実習Ⅰ（保育所）に臨んだ短期大学生117名を対象に保育実習Ⅰの振り返りに関する調査を行った。調査シートに記入したのは、当日の欠席者5名を除く112名（内：男子学生9名・女子学生103名）である。

3) 調査方法：保育実習Ⅰに関する調査シートの質問項目に記入を求め、承諾が得られた112名全員の記述内容を分類、分析した。

4) 倫理的配慮：

調査の趣旨について説明したのち協力は自由である

こと、協力しなくても不利益を被らないこと、協力の有無にかかわらず、実習の評価には反映されないこと、質問項目の記述内容については、個人名や組織名が特定されないこと、研究発表と今後の実習指導に関する検討以外には使用しないことを説明した。

5) 質問項目

- (1) 実習先で学んだこと
- (2) 実習先から指導されたこと（例：ほめられたこと／注意を受けたこと／困ったこと等）
- (3) 実習記録（時系列）を書くとき困ったこと
- (4) 保育実践について／保育指導案の作成について
- (5) 実習において努力したこと
- (6) 実習において準備不足を感じたこと
- (7) 今後の実習までに改善したいこと

6) 分析方法：記述内容の分析は、今(5)のキーワード分類法を参考に記述文章を要約・整形し、キーワードの抽出と作成を行った。

3. 分析結果と考察

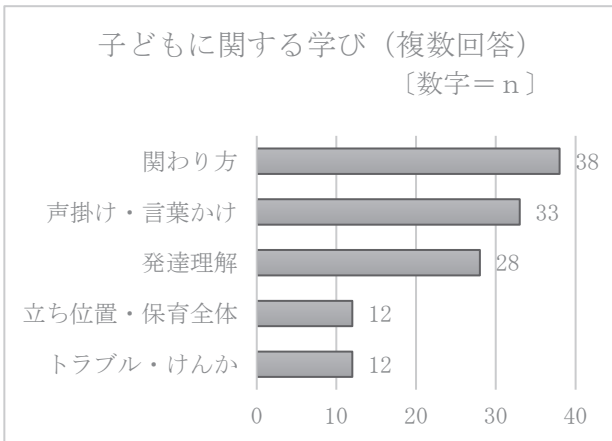
それぞれの質問項目(1)～(7)については、すべての項目に対して学生は複数回答しているため、分析方法で述べたように、学生の記述内容を整理し、同様の内容をカテゴリー項目として分類、その記述人数と割合を集計してグラフと本文に示した。尚、分析結果と考察については、それぞれの項目ごとに付記した。

(1) 保育実習で学んだこと

学生の記述は複数回答になっているものが多くあり、概ね一人につき2項目から3項目の記述がみられ、4項目、7項目の内容を記述する学生も其々一人ずついた。記述内容については、以下の①「子どもに関する学び」と②「保育者からの学び」の2つに分類された。

① 子どもに関する学び

- | | |
|------------|-------|
| ・子どもへの関わり方 | 33.9% |
| ・声掛け、言葉かけ | 29.5% |
| ・発達の理解 | 25.0% |
| ・立ち位置・保育全体 | 10.7% |
| ・トラブルやけんか | 10.7% |

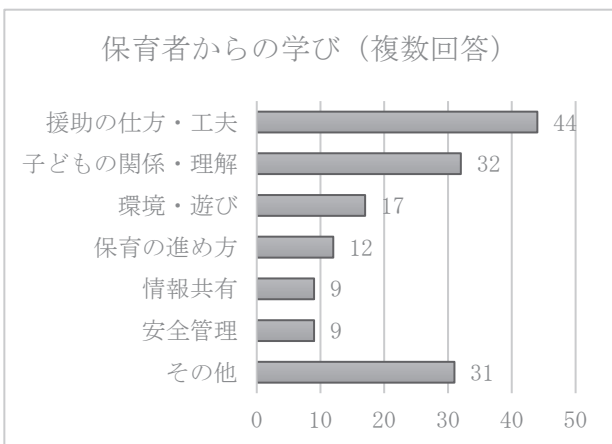


② 子どもに関する学び

関わり方や、言葉かけなど、実際に子どもと関わることで学びになったと実感している。これらは、次項②保育者からの学びに示すように、保育者の具体的な言葉かけや関わりを見ることが、学生自身の具体的な行動に繋がり、子どもからの反応とその手ごたえを学びとして捉えていることが推察される。

③ 保育者からの学び

・援助の仕方	39.3%
・子どもとの関係・理解	28.6%
・環境・遊び	15.2%
・保育の進め方	10.7%
・情報共有	8.0%
・安全管理	8.0%
・その他	27.7%



保育者からの学びのうち、その他の項目については、カ

テゴリーに分類できる内容も含まれているが、学生が自分なりに感じたことを言語化しており、より具体的な学びの記述であると判断したため「その他の記述項目」として挙げている。重複している項目については原文を損なわない範囲で整理してまとめ以下に示した。

<その他の記述項目>

- ・発達の気がかりな子どもの援助
- ・たくさん褒めることが大切
- ・臨機応変な対応
- ・子どもに見本を示すことが大切
- ・観察力が重要
- ・同じ年齢でも個人差がある
- ・細かい報連相が大事、保育者同士の共通理解
- ・職員同士や保護者との情報共有
- ・保護者との関りも大切
- ・保護者との連絡を共有する
- ・予想外の時の対応も考えておく
- ・保育者のチームワーク
- ・守秘義務について
- ・進級、進学のための準備を日ごろからする
- ・小学校のための学習が必要

【考察：（1）実習先で学んだこと】

①子どもとの関わりでは、遊びに参加する、生活援助をするなかで子どもから学ぶことが多いことが示されている。子どもとの直接的な関りから発達段階を知り、言葉かけや具体的な援助を試行錯誤しながら学ぶことが多くあり、それらが子ども理解につながっていることが推測される。これらは、保育実習Ⅰの目標にある「観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深める」に当る。

②保育者からの学びでは、実習のなかで重要な援助について、保育者を観察し、また指導を受けながら具体的な方法や言葉かけを学んでいる。全体の保育の進め方や安全管理の大切さを学んだ者もいる。情報共有では保育者同士、保育者と保護者、実習生からの報告など様々な場面においてその重要性を理解する機会となっている。

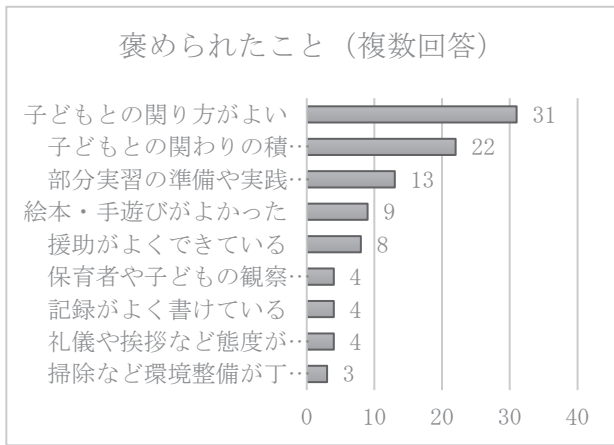
（2）実習先から指導されたこと（複数回答）

「指導」については、広範な概念を有するため、学生が記述しやすいよう①～③に例示した。（①褒められたこ

と、②注意を受けたこと、③困ったこと)

① 褒められたこと

- ・子どもとの関わり方がよい 27.7%
- ・子どもとの関わりの積極性や質問 19.6%
- ・部分実習の準備や実践がよい 11.6%
- ・絵本・手遊びがよかった 8.0%
- ・援助がよくできている 7.1%
- ・保育者や子どもの観察ができている 3.6%
- ・記録がよく書けている 3.6%
- ・礼儀や挨拶など態度がよい 3.6%
- ・掃除など環境整備が丁寧・自発的 2.3%



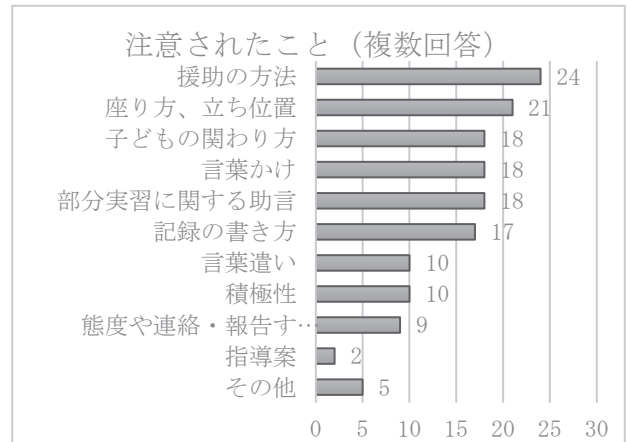
② 注意されたこと

- ・援助の方法など 21.4%
- ・座り方、立ち位置など 18.8%
- ・子どもとの関わり方 16.1%
- ・言葉かけ 16.1%
- ・部分実習に関する助言 16.1%
- ・記録の書き方 15.2%
- ・言葉遣い 8.9%
- ・積極性 8.9%
- ・態度や連絡・報告すること 8.0%
- ・指導案 1.8%
- ・その他 * 4.5%

指導案については、IAの実習では指導案作成をして部分実習を行った件数が少ないため、注意を受ける指導も少ないと推察される。

*その他については、環境への配慮に関する指導ではあるが、記述が抽象的であるため「その他」に分類し内容

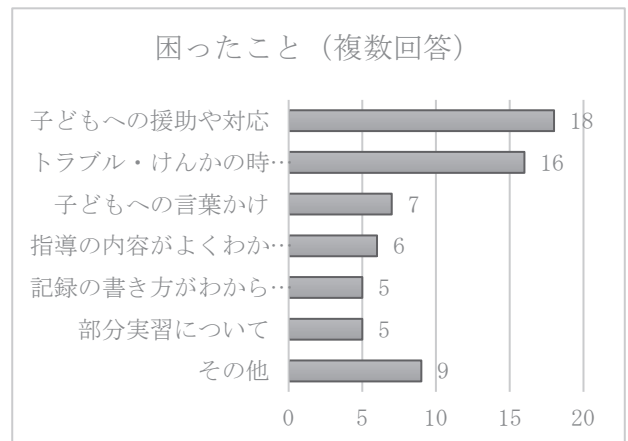
については省略した。



③ 困ったこと

- ・子どもへの援助や対応 16.1%
- ・トラブル・けんかの時の対応 14.3%
- ・子どもへの言葉かけ 6.3%
- ・指導の内容がよくわからない 5.4%
- ・記録の書き方がわからない 4.5%
- ・部分実習について 4.5%
- ・その他 * 8.0%

*その他については、いずれの記述も学生の準備不足、学習不足から起因する内容である。指導を受けつつも理解や対応に困ったという内容ではないため、その他に分類し内容については省略した。



【考察：(2) 実習先から指導されたこと (例：ほめられたこと/注意を受けたこと/困ったこと等)】

① ほめられたこと

「ほめられたこと」は少ない件数ではあるが、子どもとの関りを積極的に行っていたことが示されている。絵本や手遊びなど、保育技術の実践については、実習の初心者であっても頑張っている姿を認められていることが推察できる。実習生にとって緊張しながらも実施したことが認められることは、本人の自信につながるため、今後も保育技術を実践できる機会を設けていく必要がある。礼儀や挨拶、掃除の態度など、社会人としての態度については、ある程度できていれば褒められるということではないため、今後も具体的に伝え続けていく必要はある。

② 注意を受けたこと

子どもへの関りや援助の仕方、言葉かけなどについては、保育者から注意を受けることによって学びを得ている。部分実習、指導案や記録の書き方なども同様に、文章表現などの注意を受けながら習得していることが示されている。

保育における言葉かけや言葉遣いは、言葉の獲得期にある子どもに対する重要な保育者の援助のひとつである。普段の言葉や友だち同士の会話で用いる言葉が、そのまま意識せずに子どもに向けられているときに、保育者から指導を受けていた。学生の言葉づかいに関する指導は、今後も意識しておくべき課題である。

③ 困ったこと

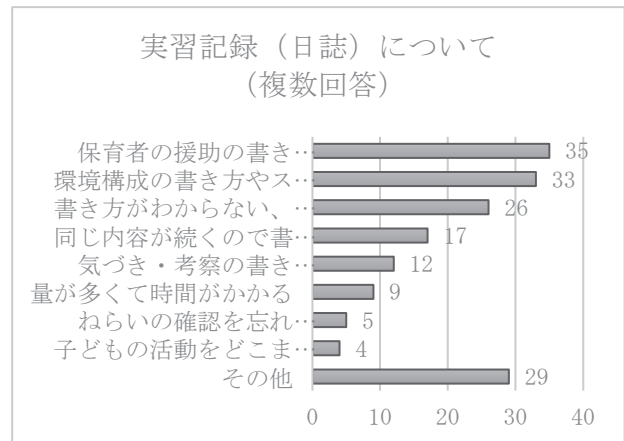
子どもとの関りが積極的だった学生ほど、関わり方や援助の実践から対応に困ったことも多いと推測される。特にトラブルやけんかの場面での対応は、実習生にとって難しいところである。「指導の内容がよくわからない」については、注意されたことがわからなくても保育者に聞き返す、質問すること自体が難しいのであろうと推察する。

(3) 実習記録を書くときに困ったこと

実習記録（時系列による記録のみ）について、学生の記述は複数回答になっている内容が多くあった。

- ・保育者の援助の書き方、意図がわからない 31.2%
- ・環境構成の書き方やスペース 29.5%
- ・書き方がわからない、大学とちがう指導 23.2%
- ・同じ内容が続くので書きにくい 15.1%
- ・気づき・考察の書き方、配慮との違い 10.7%

- ・量が多くて時間がかかる 8.0%
- ・ねらいの確認を忘れる。目標の記入。 4.5%
- ・子どもの活動をどこまで書くのか 3.6%
- ・その他 * 25.9%



*その他について、カテゴリーに分類されない回答が多く見られた。学生が自分なりに感じたことを言語化しており、具体的な記述であると判断したため、重複している内容については原文を損なわない範囲で整理して、同様の文脈にまとめた。

尚、その他①②に分類した理由は、①は、学生への指導で今後、検討する視点として。②は、実習先との連携、調整していく必要がある視点と判断して分類した。

<その他①>

- ・話し言葉と書き言葉の違いが難しい
- ・1枚では書ききれない、字が小さいと注意された
- ・子どもと関わっていないときの内容が書きにくい
- ・ポジティブな表現、言葉の使い方、文章が難しい
- ・注意された内容の理解ができず毎回同じミスをした
- ・「～させる」などの言葉を使用した。言葉遣いが難しい
- ・言葉（ら抜き、い抜き）の使い方
- ・専門用語の使い方がわからない
- ・言葉かけをどのように書いたらよいかわからない
- ・お昼寝を午睡と書くなど保育用語を知る必要
- ・見やすいように書くように言われた
- ・日誌用紙が足りない、予備がほしい
- ・メモが取れず記憶があいまいになる

<その他②>

- ・保育者によって訂正されることが違う

- ・同じ内容でも先生によって書き方の指導が違う
- ・園から項目の変更を言われて難しかった
- ・行間を空けて書くように言われた
- ・赤で修正されたがどうすればよいかわからなかった
- ・食事の介助が担当制で観察できなかった
- ・返却が遅く、注意事項がわからず同じ間違いを続けた
- ・書き方の指導はよいが書き直しが大変だった
- ・修正部分があると全部書き直し3日分書くことがある

【考察:(3) 実習記録(時系列)を書くとき困ったこと】

保育実習Ⅰの実習では時系列の記録であるが、大学での事前指導だけでは理解が難しく、実際に観察や実践をした内容を書く段階で「書き方がわからない」ことに気付く学生もいたと考えられる。また、見てわかることの記入だけでなく、保育者の意図を捉えることは難解ではあるが、観察の仕方や要点、あるいは推測できないことは、保育者に直接質問するという事も伝えていく必要がある。

(4) 保育実践について/保育指導案の作成について

①保育実践について

・部分実習1回	42
・部分実習2回	26
・部分実習3回以上	26
・していない	18
・半日・全日	2

<行わなかった理由>

- ・1回目は観察のみで必要ないと言われた
- ・設定保育をしていない園のため
- ・行事で時間がない
- ・2日ずつ全クラスを回った
- ・担当制のため設定は無いと言われた

②保育指導案の作成について

・書くように言われた	50
・不要と言われた	47
・自由と言われたが書いた	3
・自由といわれたので書かない	1

【考察:(4) 保育実践について/保育指導案の作成について】

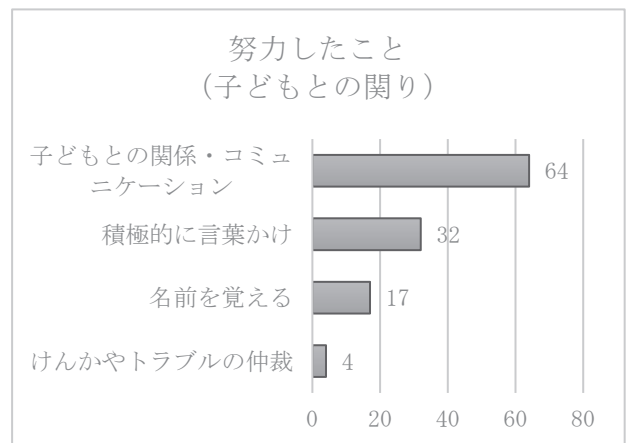
初めての保育実習において、保育実践(部分実習)は、多くの学生が経験していた。保育実践をしなかった学生は少ないが、その理由として実習園側の保育形態や実習形態(全クラスに順に入る)であることが推察される。指導案については、作成した者と作成しなかった者とは、概ね半数ずつであった。その違いについては、其々の実践内容との関連を捉える必要がある。

(5) 実習において努力したこと

記述内容については、以下の「子どもとの関わり」と「実習生として」の2つに分類された。

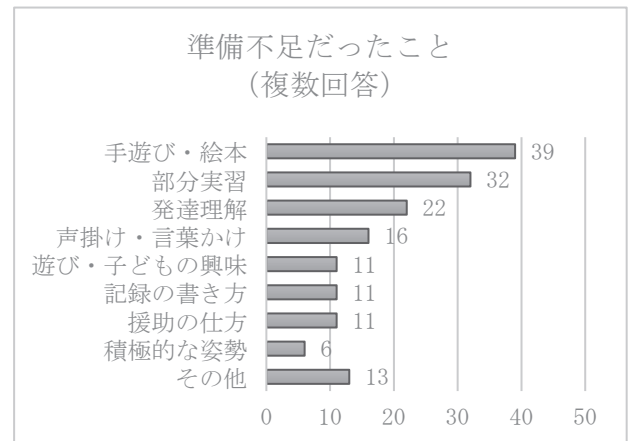
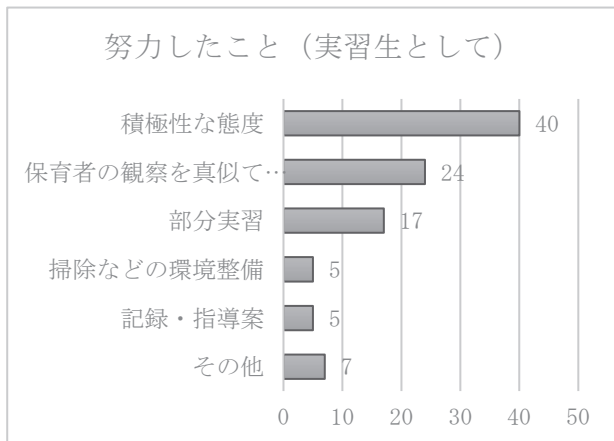
① 子どもとの関り

・子どもとの関係・コミュニケーション	57.1%
・積極的に言葉かけ	28.6%
・名前を覚える	15.1%
・けんかやトラブルの仲裁	3.6%



② 実習生として

・積極的な態度	35.7%
・保育者の観察したことを真似て援助	21.4%
・部分実習(絵本・手遊びなどの実践)	15.1%
・掃除などの環境整備	4.5%
・記録・指導案	4.5%
・その他	6.3%



【考察：(5) 実習において努力したこと】

子どもとの関りで努力したことは、コミュニケーションの取り方や言葉かけである。特に言葉が発しない、未熟な乳児クラスの段階でのコミュニケーションは難しいが、保育者を真似ながら自分なりに関わっていたことが示されている。実習生としては、積極的な態度や保育者の言動を真似て援助する努力をし、関わり方を模索しながら子ども理解の学びにつながっていると推察する。

また部分実習ではクラスの子どもたちを集団として保育する経験となり、たとえ計画通りでなくても失敗であっても保育技術を高める機会となっている。

(6) 実習において準備不足を感じたこと

・手遊び・絵本	34.8%
・部分実習	28.6%
・発達理解	19.6%
・声掛け・言葉かけ	14.3%
・遊び・こどもの興味	9.8%
・記録の書き方	9.8%
・援助の仕方	9.8%
・積極的な姿勢	5.4%
・その他	11.6%

その他については、重複している内容については整理して、同様の文脈にまとめた。

<その他>

- ・脳内シミュレーション
- ・0～3歳児について復習しておくべきだった
- ・壊れにくい名札づくりをする
- ・言葉の知識の量が必要
- ・年齢に合った目標の設定
- ・安全面の配慮
- ・障害児への対応を学んでおく
- ・ピアノを実習までにできていなかった
- ・指導案の書き方、臨機応変に対応
- ・子どもについての知識が足りない
- ・何もしていなかった

【考察：(6) 実習において準備不足を感じたこと】

実習が始まってから、また実践してみて困ることがあると思われるが、手遊びや絵本、部分実習での準備面が不十分であったことが多く挙げられている。この実践経験から自身の課題にも気づいたことと思われるので、次の実習には改善して臨むことを期待する。

(7) 今後の実習までに改善したいこと

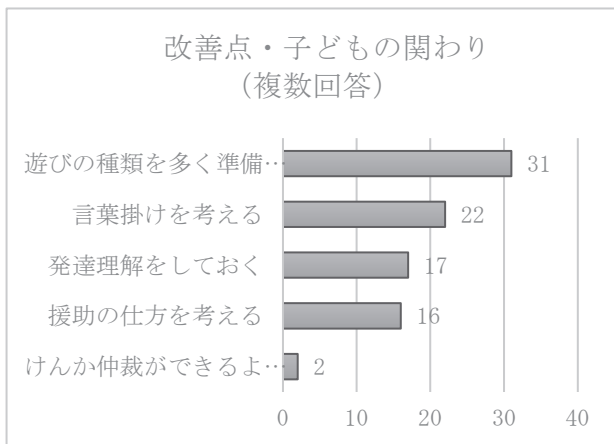
複数回答から、記述内容については、以下の「子どもとの関わり」と「実習生として」の2つに分類された。

① 子どもとの関り

- ・遊びの種類を多く準備する 27.7%
- ・言葉掛けを考える 19.6%

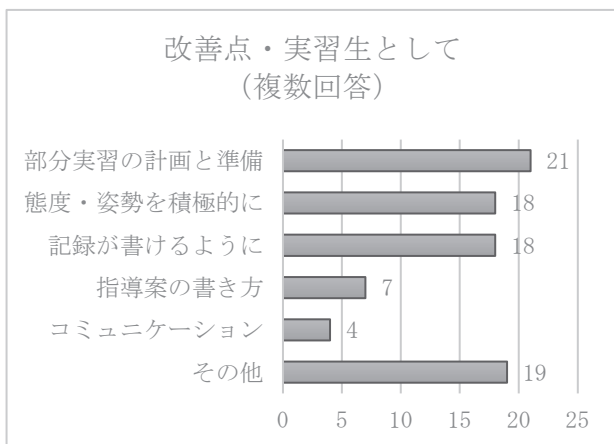
- ・発達理解をしておく 15.1%
- ・援助の仕方を考える 14.3%
- ・けんか仲裁ができるように 1.8%

(6) の準備不足を感じたことで、「手遊び、絵本」「部分実習」の記述が5割を超えていた。準備不足の実感が、「遊びの種類を多く準備する」の記述に繋がっていると推察する。



② 実習生として

- ・部分実習の計画と準備 18.8%
- ・態度・姿勢を積極的に 16.1%
- ・記録が書けるようになる 16.1%
- ・指導案の書き方 6.3%
- ・コミュニケーション 3.6%
- ・その他 17.0%



その他の記述は、「健康管理」、「知識、技術の習得」、「言

葉遣いの改善」「自分の得意を活かす」に関することが重複して記述されており、いずれも実習生としての望ましい姿勢やあり方などの内容である。

【考察：(7) 今後の実習までに改善したいこと】

子どもとの関わりにおいて何が必要なのか、実習生として何を準備しておくべきかを具体的に自覚できていることが示されている。特に指導案を作成した学生は、保育には計画と準備が重要であることに気付いた学生が多い。学生の改善点の気づきは、次の段階の事前指導での学びに活かせるようにしていくことであると考ええる。

4. 総合考察

ここでは、(3) 実習記録を書くときに困ったことと(4) 保育実践について、2項目に着目して考察する。

(3) 実習記録を書くときに困ったこと

複数回答とはいえ、学生の困り感が浮き彫りになった記述内容であった。「保育者の援助の書き方や意図が分からない」という記述の割合が最も多かった。初めての保育実習では、保育者の援助の姿は記述できても、意図の読み取りまでは、難しいと考える。

これらの結果から、記録の指導のあり方については、記述内容の指導だけでなく、保育用語の学修や記録を書く際に、学生が保育のどの場面の何に着目するのか、保育を観察・記録する視点の提示、環境構成の記述のポイント、保育者の意図を捉える視点などを含む指導を行うことがより必要であることが明らかになった。

今後は、さまざまな事例を読み解く経験を通して、記述する力を伸ばしていきたいと考える。

また、カテゴリーに分類できない「その他」の記述数が多いことは、個々人で感じていることの他に、実習先により、あるいは同じ実習先でも、配属されたクラスの指導者により指導が異なることなども、学生の戸惑いの表れではないかと推察する。

その他①②の分類については、分析結果と考察で述べたように、①は、学生への指導として検討する視点として、②は、実習先との連携、調整していく必要性がある視点として分類した。

実習先との連携については、重要視されるべきことであり、全国保育士養成協議会においても、実習指導者研

修の実施などで、実習における養成校と実習先との緊密な連携が示されている。これらの内容を精査し、具体的な対応を行っていくことは、保育実習Ⅰだけでなく、連続性のある保育実習Ⅱの指導においても重要であると考えられる。

(4) 保育実践について

多くの学生が、参加実習として保育実践の経験を得ている。しかし、(6)の準備不足を感じたこと、で記述されていたように、教材の準備や実践できる種類の乏しさが伺える。準備不足であると実感したことは、実践のためのスキルを求めていることでもある。今後は、より実践的な保育ができるよう実技や模擬保育の実施ができるよう指導していく必要がある。子どもたちの前に立ち実践することで、たとえその実践が上手くいかない経験であっても実践を積み重ねることで技術力は高まり、同時に子ども理解、発達理解に繋がっていくと考える。

さらには、厚生労働省が定める第一段階の実習内容は、「観察、参加」実習であるが、実際に半日・全日実習を行っている学生が2名いた。

指導案作成や実践準備について事前の指導が不十分であっても、学生にとっては有意義な実践経験となったと推測するが、学生の記述には、「半日実習の指導案の書き方がわからない。」という戸惑いが書かれていた。

第一段階の実習では、実習に関する基礎的な学びに重きを置くため、事前指導において「保育計画」、「指導案作成の基礎」について、指導をおこなっているが、半日実習、もしくは全日の実保育実践が行えるようになるための指導内容までは、十分に行えていない現状である。そのため、実際にどのような内容だったのか、学生に負担感などはなかったのか、再度の確認は必要である。

実践後の反省・振り返りに対して、どのような指導が行われていたかも重要であり、次の実習に活かすことができるようになればよいが、自信喪失につながることも懸念されるので、事後指導のあり方も考えなければならない。

5. 今後の課題

本稿では、学生の記述内容を詳細に分析することで、学生の視点からとらえた保育実習の今後の指導のあり方を探ることであった。しかし、指導内容と学生の記述分

析との関連性、さらには実習先の評価との整合性の確認は時間的に難しく、今回は学生の記述内容の分析だけにとどまった。今後は、それらの関連性も明らかにしていく必要がある。

実習指導の内容が年々増えてきている中で、どれもが優先されるべき内容ではあるが、カリキュラムの策定に際して、実習指導に関する内容の共通性、関連性、独自性を精査しながら、其々の実習指導で行うことと、資格取得に向けた学外実習という枠組みのなかで、共通して行う指導内容について、指導の時期や分担を整理していく必要がある。

平澤(6)は保育実習指導の在り方として重要なのは「自己課題の明確化」であるとし、「自己省察する過程の中で、自己課題を明確にできた」学生ほど、「より質の高い実習」につながると述べている。実習での実践は、上手くいかなかったことを言葉にして反省、省察し、具体的な助言を通して学びが深まる。同時に、できていたこと褒められたことも自信と意欲につながるため、実習後の省察を確認し、次の実習へ繋げる連続性を持たせた実習指導が必要となる。

6. おわりに

学生が困ったこと、戸惑ったことの一つとして、実習先のクラスの指導者によって指導内容が変わることである。10日間の現地実習では、様々な年齢の子どもと関わることができる良さはあるが、実際に毎日、配属クラスが変わるといえるのは、はたして学生にとって学びの深まりになるのか、という点である。様々な年齢の子どもと関わることで、子どもの発達の違いを見ることはできるが、1日、2日の中でどれだけ学びが深まっているのかは不明である。

例えば、10日間のうちの前半5日と後半5日で、3歳未満児と3歳以上児とに入らせていただくことで、子どもとの関わりを増やししながら、子どもとの関係を深めることができる。それらの関わりから見出された気づきが、記録の記述に繋がるのではないかと考える。このような提案を実習の依頼時にクラスの配属について、大学側から行うのも一案である。しかし、受け入れ先の実習指導者の負担が偏る懸念もあるため、丁寧なすり合わせが必要となる。

また、保育実習Ⅰでは、デイリープログラムとしての保育の1日の流れを把握するために、時系列の実習記録

の記述は欠かせない。しかし、時系列の記録を10日間書き続けるのではなく、例えば、時系列の記述日数を減らし、学生が子どもとの関わりで感じたこと、気づきを書くエピソードの記述を保育実習Ⅰから組み込んでいくことも検討の余地がある。しかし、IAでは配属クラスが固定ではなく複数クラスや全クラスに入るということも多いので難しい面はある。それらを踏まえて、実習依頼時の事前調整で、実習先と検討していくことが重要ではないかと考える。

「はじめに」で述べたように、少人数とはいえ、資格取得に必要な実習を通して経験を積み重ねても、保育に自信が持てない、保育の仕事は大変であると考えた学生がいる。その要因となる事柄は、実習だけではないが、学生の資質の問題だけにとどまらないことも推察されるため、前述したように、今後は更なる実習先と養成校との実際の、具体的な項目についてすり合わせをおこなっていく必要性が伺える。

次に、学生の理解や記述のレベル差をどう埋めていくのかも課題である。授業時間外での個別指導の必要性、重要性は承知しているが、2人の教員がそれぞれ約50人前後の学生を担当しているため、時間外の個別指導の対応には限界がある。ただ、指導をしていて思うのは、教員に質問できる、あるいは友だちに相談することができる学生は、時間はかかっても自身の課題を見出し、行動目標を定め、それに向けて動くため、ほぼ問題ないと思われる。しかし、自身のわからないこと、理解できていないことが何なのかを把握できていない場合があるので、実習前に必要な項目を自己チェックできる方法を考えてもよい。また周囲との関わりを持とうとしない学生に対して、今後の実習指導においてどのように支えていくのかも課題であると考ええる。

7. 引用文献・参考文献

- 1) 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説」フレーベル館。
- 2) 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2018) 「保育実習指導のミニマムスタンダードVer.2」 中央法規。
- 3) 小島千恵子 (2020) 「学生は『保育実習』から何を学ぶのか」 名古屋短期大学研究紀要 第58号 p 59-69.
- 4) 川原亜津美 (2016) 「保育実習Ⅰを通して得た学生の学びに関する考察—学生が実感できる学びとその過程—」 高松大学研究紀要 第66号 p 1-9.
- 5) 今尚之 (1996) 「自由記述文の分析に対するキーワード分類法の適用」 言語広報センター広報 Language Studies 第4号, P81-91 小樽商科大学言語センター。
- 6) 平澤節子 (2020) 「保育実習指導のあり方—事後指導における評価と振り返りに関する考察—」 名古屋女子大学紀要 第66号 p 225-237.
- 7) 戸田恵理子、小浦康平 (2020) 「保育実習の振り返りに関する研究」長崎短期大学研究紀要 第32号 P25-37.
- 8) 加藤朋江 (2020) 「保育所実習によって学生たちは子どもから何を学ぶのか」 福岡女子短期大学紀要 第85号 P25~36.